

# 歴史を歩く (27)

## 『戦国時代の群像』

### 第十二話 島津氏と肝付氏の出自



永祿3年(1560年)3月、肝付兼統が日向の伊東義祐と共同して飢肥の島津忠親を攻撃した。島津本家と肝付氏の戦いはもはや避けられない状況になっていた。

そもそも島津本家と肝付氏が友好関係を保つため姻戚関係結んだとしても、大隅半島での覇権を狙う肝付氏と、日向・大隅・薩摩の三州統一を目指す島津氏が、いずれ決着をつけなければならぬのは当然の流れであった。まして肝付氏は伊東氏とも姻戚関係にあった。古くから反目の立場にあった伊東氏が島津氏に対して友好関係を築くことなど到底期待できるはずも無く、結果的に肝付氏は長年の朋友である伊東氏と組み、島津氏に対抗する姿勢をとったので

ある。

南九州の覇権をめぐる島津氏と肝付氏の因縁は、それぞれがこの地に出現した時代から定められた宿命だったのかもしれない。

肝付氏は平安時代中期から末期まで西日本最大の荘園と言われている島津荘の荘官(荘園の現地管理者)として日向・大隅・薩摩の三州に勢力を振るっていた。

島津荘とは、万寿3年(1026年)に大宰府の『大監』という高位の官人であった平季基が弟良宗とともに日向国諸県郡島津(現在の都城市)に来て、荒野を開拓し、これを時の権力者であった関白藤原頼通に寄進したことに始まる。やがて島津荘は大隅の肝付氏、薩摩の伊作氏らの所領の寄

進を受けながら次第に拡大していった。

肝付氏はもともと『伴』という姓であった。伴兼行は安和元年(968年)に大宰府の大監となり、薩摩掾(＝国司)を兼ねて、翌年薩摩国に下向した。鹿児島郡神敷村(鹿児島市伊敷)に館を構えたと伝えられており、そこは『伴掾御館』という遺跡名として残っている。一説では薩摩国総追捕使という、軍事・警察的役目を担っていたと言われている。長元9年(1036年)伴兼貞の時に大隅国弁済使となり、高山に拠点

を移し、肝付郡を領した。弁済使とは下司とも呼ばれ、荘園の管理事務を行う役目である。さらに兼貞は、島津荘を開拓した平季基の娘と結婚し、やがて男子の無かった季基の跡継ぎとして島津荘を譲り受けた。

こうして、伴氏は肝付郡の他に、藤原摂関家を後盾とした三州にわたる広大な領地を得たのである。兼貞の長男兼俊は肝付姓を称し、肝付家の祖となり、

肝付家一門で三州各地に領地を与えられ、繁栄を極めたのである。詳細な点について他に諸説があるが、肝付氏の出自はこのようなものである。しかし、肝付氏の栄華は平氏の滅亡とともに潰れてしまう。平安末期、島津荘の領主は藤原摂関家から平家へと移っていた。よって平氏の所領である島津荘は鎌倉幕府に没収され、かろうじて肝付氏の所領である肝付の地は安堵されたのである。元暦2年6月(1185年)源頼朝によって没収された島津荘の領主は藤原摂関家筆頭の近衛家となり、その下司に任ぜられたのが鎌倉幕府の有力御家人であった惟宗忠久で

ある。そしてさらに忠久は建久8年(1197年)に大隅国、薩摩国、日向国三州の守護に任じられ、これ以降、惟宗忠久は島津荘の地名から島津姓を称するようになった。

こうして、肝付氏と島津氏の2大勢力は南九州に生まれたのである。永祿4年(1561年)、肝付兼統は飢肥方面に向けていた兵を大隅に向けた。廻城(霧島市福山)攻めである。これは、島津忠良・貴久らに対する本格的な宣戦布告であった。

(大崎町教育委員会 内村憲和)

肝付氏系図

仲兼——兼遠(判官代冷泉院安和元年(九六八)七月七日薩摩守護職賜)——兼行

行貞——兼貞

兼俊(兼俊)

兼任(秋原氏)

孫・兼広

俊貞(高山郷土誌では兼貞・安業氏)

行俊(和泉氏)

兼高(梅北氏)

肝付氏出現までの系図